

## 意見

## 加藤 和哉

「中世哲学と現代」というシンポジウムのテーマを眼にして、まず頭に浮かんだのは、そもそもこのテーマによって、中世哲学会は（ないしそこに属する私たちは）何をしようとするのか、何ができるのかという問いであった。たしかに私たちは、中世哲学研究を行うかたわらで、現代を生きる一人の人間として、社会の様々な現場に臨んで哲学し、何らかの発言をなしたり、状況の変化に貢献したりすることができよう。その際、中世哲学に学んだことを、何らかの意味で生かしたり、応用したりすることもできるかもしれない。しかし、それは中世哲学者としてなのだろうか。アリストテレス流の言い方をすれば、それは本質的に（per se）中世哲学者の行為ではなく、たまたま（per accidens）中世哲学者のものであるに過ぎないのではないのだろうか。それとも私たちは、本質的には哲学者なのであって、たまたま中世のテキストを素材にしているに過ぎないと言うのか。しかしそうだとすれば「中世哲学と現代」という標題は、不適切なものであるということにならないであろうか。

私たちの多くは大学等に勤務し、中世哲学を講じ、あるいは執筆に従事し、このような学会に集う。それらの場所で扱われているのは、本大会の諸研究発表でも明らかのように、少なくとも一見したところでは、現代の問題、現代の状況ではない（「永遠の現在」の問題だとはいえるかもしれないが）。いったい、中世哲学のテキストを研究し、これと対峙しながら思索をするただ中から、現代の問題に向かうということはあるのか、ありうるとすればどのようなことになるのだろうか。あるいは、現代の状況に対して中世哲学固有の仕方でも臨むといういうことは、いかなることなのか。私の意見は基本的には、このような問題提起に尽きている。

私が岩田靖夫氏の基調提題に関連して述べたものも、以上のような関心から、中世哲学から現代への示唆なり貢献の内容を考える前に、現実の問題について考える際の中世と現代の根本的な思考の枠組みの違い（実践生活が人間の生にとって持つ意味、思考と実践との関わりなど）を確認しようとするものであった。ロールズの国家論においては、公共的価値である正義のみに関心が払われ、それ以外の善の諸要素は主観的なものであり、公的な問題とされないと言われる。この枠組みの中では、真理探究、

学問もまた、公共的価値に奉仕する限りで認められるか、あるいは、個人の美的・趣味的生活に属するものと位置づけられるかであろう。卑近な例であるが、大学やその学問が批判にさらされるとき、しばしば持ち出されるのも、学問追求がまさにそれ自体のためになされていて、社会や国家の「ニーズ」に答えていないということなのである（岩田氏は、現代の政治哲学が、市民を有徳なものとすることを目指さない点で、アリストテレスから大きく隔たっていることを指摘しているが、私にはそれに加えて、実践生活を越えた、あるいはむしろ最高の実践である観想（テオリア）の場所が考えられていないという点でも、アリストテレスの「倫理学-政治学」の枠組みを離れていると思われる）。

これに対して、中世においては、観想生活こそがより高い人間の理想として考えられていたのではないか。そして、これを学問的に追求する場として大学に代表される「スコラ」が成立し、独自の真理探究と教授のシステムが生み出される一方で、観想を生きる場として修道生活が発達したのではないか。とすれば、そのような観想の場、真理の場を語り開くこと、その可能性を論じ、あるいは実践することこそ、中世哲学（会）の現代的意義なのではないか。中世に起源を持つ大学（university）という制度が日本の現代的状況で限界を迎えているというならそれはそれでいい。ただそれと同時に、大会初日の特別講演で今道友信氏が述べられたように、普遍のありか（universitas）が見失われつつあるのだとすれば、それに手をこまねいていて、儼然として私たちは中世哲学に忠実であることができるのだろうか。

---

## 意見

桑原直己

今回のシンポジウムのテーマは、実質的には「中世政治思想の現代的意味」を探るものであると理解するが、この課題は、岩田氏が見取り図を描いておられる現代倫理学の言説の中では、ほぼ必然的に「共同体論」の方向に位置づくであろう。稲垣氏の論点は、徳倫理に裏付けられたトマスの社会理論の意義の再評価にある、と考えられる。私も、徳倫理の復権、特に倫理における愛の位置付けに関心を持つ者であり、その限りで氏の立場に共感を覚える。また、清水氏による提題も、中世哲学を研究し